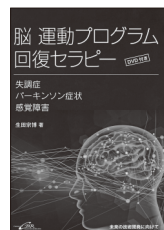


生田宗博（著）

脳運動プログラム回復セラピー —失調症，パーキンソン症状，感覚障害

鎌倉 矩子

（広島大学・国際医療福祉大学名誉教授）



運動失調，パーキンソン症状，痛みといえば，臨床家たちが手をこまねく症状の代表格である。著者生田は，身ひとつでこの難題に切り込んだ。本書はその生田の最近 20 年にわたる試行の集大成である。

本書は決して読みやすくない。独特の用語と言い回し，独特の体内文法（評者の造語です）がしばしば読み手を惑わせる。文章構成もイラストも，決して読み手に親切ではない。にもかかわらず，紙面のあちこちに繰り出される手技や，患者にかける言葉や，驚くような患者の反応が，読み手を惹きつけてやまない。

生田は，自分の身体とアタマと心のすべてを尽くして患者に立ち向かっている。揺れの激しい失調症の患者に，物をつかんでその位置に手を保つ訓練を行おうとするとき，彼は自身の身体を患者の身体に密着させて立つ。自分の片手と体幹で患者の体幹をしっかりと

固定し，他方の手で患者の腕と手の動きを誘導しつつ話しかける。「私がしっかり支えていますから，力を抜いてください」，「揺れなくなってきた，この感じを味わってください」そうやって患者の感じ方が変わるのを待つ。

肩の痛みに苦しむある患者には「揺すり」の手技が施される。緊張が解けたところで，「痛くないようなら一緒に動かしてください」と言い，他動から自動へと運動のレベルを引き上げる。「あーうれしい。自分で動かせるし，痛くありません。ふしぎ！」，「先生の手は神様です」と患者の反応が返る。

さまざまな手技の創出や小道具の利用は，そのとき・その場の臨床思考の産物であるが，直感的着想である場合もある。「診る」→考える→試す」という連環の重要性は，著者が最も伝えたかったことだ。

日常生活への助言が含まれると

はいえ，生田の主力は“徒手操作”による基本動作の適正化に向けられている。姿勢変換や移動における重心移動の適正化にも多大な注力がなされる。それゆえ読者の中には，生田のアプローチを理学療法的だとみる人がいるかもしれない。それを見越してか生田は，終章で『理学療法士及び作業療法士法』を引きつつ，彼のアプローチは作業療法だと主張している。

しかし，職種の棲み分けは政治・社会的事象であり，生田が追究してきたのは生理・心理的事象である。次元が別なのではないか。

本書の内容は，作業療法士に対しても，理学療法士に対しても，十分に刺激的かつ挑発的である。そのインパクトをどう活かすかは職業人個々の問題だと思う。

〔 B5 判 256 頁 6,400 円 + 税 〕
シービーアール 刊
☎ 03-5840-7561